



年下のオトコノコ



sanuki soba

4月、大学は新勸期真っ最中で、キャンパスはどこもかしこも新入生獲得に必死な先輩たちであふれております。大学2年生になった彼も例外ではなく、今日もひとり部室に残って勧誘の準備に追われていました。

勧誘活動が始まってまだ3日目だけど、2日に降った雨で看板はおしゃかになっちゃったし、思いのほか新入生が興味を示してくれたおかげでビラも足りなくなっちゃって、しかもビラに書いた連絡先には予定していたよりもはるかに多くのメールがきてて、さらには部室をノックする新入生まで。そうした用事を彼は淡々とこなしていたのです。看板の作り直し、ビラの印刷、メールへのお返事、部室に来た新入生との会話...よくもまあこれだけのことをひとりで。

もちろん、作業を始めた頃は同学年の子も手伝ってくれていたし、本来は新勸の手伝いをしない3年生とか4年生、さらには差し入れを持ってきたOBまでもが手伝っていてくれたんだけど、1人、また1人とバイトやら他のサークルやらデートやらで抜けていき、部室棟が閉まる30分くらい前、守衛さんがまもなく閉館することをつけにくる頃、気付けば彼はひとり部室でもそもそもくもくと作業をこなしていたのです。

作業もようやく目処が立ち、残りは明日の午前中に片付ければいいのか、大丈夫大丈夫きつと間に合う。とひとりごちて帰ろうかと後片付けを始めトンカチを手に取った瞬間、ノックもなく開くドアが開かれ見慣れた顔が覗きました。

そこからこのお話は始まります。

「あれれ、じゅんくんか。新勸？」

デニムのミニスカートにブラウスとカーディガンというとても春らしい格好で彼女は部室に入ってきた。歩くたびに決して高くはないヒールの音が部室の中に響く。ミニスカートの中が見えちゃうんじゃないかとはらはらする僕を気にするそぶりもなく、ソファに腰掛ける。すらっと伸びる綺麗な足を誇らしげに演出するソファは、家具店で働くOBから昨年格安で購入したものだ。そっけない部室の最も素敵な存在である。

彼女は3年生の智美さん。おとなしいだけでなく、上品な子が多くコンパで泥酔する人なんて確実に出ないような極めて文化的なこの集団において、珍しく仕切りのいい闊達なお姉さんタイプの先輩。男女比率が4対5くらいで女子の方が少し多めのサークルの中で彼女を頼りにしているのは女子だけじゃない。日頃リーダーらしく振舞いたがる居酒屋のおっさんみたいな男子たちもなんのかんのと智美さんをあてにしているところがある。

「智美さんこそどうしたんです？もう閉まる時間ですよ？」

お姉さんタイプとは言うものの智美さんはその大人っぷりから声をかけにくい部分がないでも

ない。彼女がいればなんとかなるだろう、と内心想いつつ、そんな内心がバレたら「いい加減にしなさい」と怒られてしまいそうだし、仕切りのよさに甘えているのがつたわると本当に不機嫌になるもんだから結局「頼りにはなるんだけど...ちょっと話しかけづらい先輩だよな」というのが後輩の率直な感想だ。同学年の啓介はこのサークルに入ったころから果敢にも智美さんと打ち解けるべく色々と誘いをかけていたけれど、すべてをさらっとかわされた今ではもう興味を持たなくなってしまっている。

もちろん、典型的に内向的な僕にとって智美さんが話しにくい存在である点は間違いがない。彼女には欠点もないし、話しかけにくいことについても彼女に非はまったくくない。けれど、僕は自分のふがいなさや頼りなさやあだとなっていて、彼女の前に立つと、こんなこと話して馬鹿にされるんじゃないか、迷惑かけてしまうんじゃないか、僕なんかが迷惑かけたりしたら他の皆に怒られてしまうんじゃないかなどと考えてしまい、それならいっそ話しかけないほうがいいのかもしれないなどと思ってしまう結果、タダでさえ口下手な僕はよりいっそう口下手になってしまうのだ。

彼女の前での僕は、日頃の僕の発言量比30%オフ（当社比）くらいである。

「わたしは友達と学部のラウンジで話してたらこんな時間になっちゃってて、そろそろ帰ろうかと部室棟の前を通ったら部室の明かりがついてたから誰だろって気になって覗きにきたの。そうかーじゅんくんだったか」

「ええ、まあちょっと前までは他の子もいたんですけど」

「新勧はどうなのうまくいってるの」

「うまく行き過ぎてて、ピラも人でも足りない感じです」

「あら、珍しいね。毎年このサークルはピラがあまることで有名だったんだけど。そうかそうか。ガッツリ盛り上がり系サークルよりのんびりまったりサークルの方が今年は人気あるのかもね」

「そんなもんですかね。テニサーはテニサーで相変わらず人気ですよ」

「ふうん。まあテニサーはテニス目的じゃない子が多いしね。で、じゅんくんは何してたの」

智美さんからはいつでも言葉が泉のように湧いてくる。親友とでさえ言葉に詰まるときが多い僕からすると驚異的な能力だ。僕としては自分が会話をリードするよりはむしろ質問を矢継ぎ早に繰り出してくれた方が、答えるだけで済むからラクなんだけど、智美さんほどに会話のテンポがはやいとついていくのに必死だ。そしてもうすでに僕はだんだんついていくのに必死になりつつある。

「とりあえず看板の作り直しに目処が立ったから片づけをしているところですよ」

「看板壊れちゃったの」

「昨日の雨で印刷がにじんじゃったんですよ」

「だから毎年ちゃんとペンキで塗れっていったのになあ。もう昔の看板の上に紙を巻いて作る

方法はやめたらいいのに。その看板だってもう10年近く使ってるはずだよ」

「そうですねえ。釘も飛び出してて危ないから今日はちょっと念入りに修理してみました」

「修理なんてけち臭いこと言わないで新しく作っちゃえばいいのに。その看板、来年からは使わないようにね。危ないし。禁止」

正直、せっかく直した看板なのに、と思わないではなかったけれど智美さんがそういう以上は逆らえるわけがない。あっという間にこの看板は今年で引退を迎える運びとなってしまった。

智美さんはいつもこんな具合にしてサークルの方向性を決めていく。なかには正しくなかった決断もあったのかもしれないけれど、今のところサークルが滅亡するような危機は迎えていないし、以前より運営はうまくまわっているようだから、きっと智美さんの能力は偉大なんだろう。そんな人がこんな場末のサークルに収まっていたいいのか、というのは僕らの間でしょっちゅう議題にのぼるテーマである。

場末のサークル。そう、このサークルはまったく華やかなサークルではない。人数が20人ほどで、することといたらメンバー同士で本を貸し借りして読むだけの読書サークル。一応「日本現代文学研究サークル」みたいな名前は掲げているけれど、実情としてはそれぞれが読みたい本を読み感想文集を年に2回ほどまとめるだけというあってもなくても変わらないようなサークルだ。サークルとしての活動自体があまりないものだからこそ、コンパやら合宿やら遊びのイベントやらが充実している方なのかもしれない。合宿と称した旅行は年に4回ほど、コンパは月に1回のペース。あとは適当にメンバー同士で打ち合わせて遊びに行ったりただの友達が集まったようなサークル。こうしたイベントや、文集、新勧等々様々な局面で智美さんは活躍していて、僕らは指をくわえて眺めているだけ。智美さんがいなくなったらこのサークルはどうになってしまうのか、今から不安ではある。

「で、作業は終わったの」

ソファで自分の爪を眺めながら智美さんが尋ねる。部室に来るといつも智美さんは自分の家にいるかのように振舞って、僕みたいな男子校出の女性になれていない人間をいつもどきどきさせる。

「一応。あとは明日の午前中でいいかな、と」

「そろそろ部室追い出し始まるしね。じゃあ今日はもう帰るんだ」

「ですね。特に予定もないし、このまま下宿に戻ります」

たしか冷蔵庫の中には使いかけのキャベツと葱があったはず。賞味期限を過ぎちゃったインスタント麺もあるから野菜炒めをのつけたラーメンでも作ろうかな、豚肉くらい買ってとってもいいかななどと僕は考えていた。

下宿一々といっても実際にはただの一人暮らしだけど一々を始めてから2年目に突入して、僕は最

近料理に凝っている。材料があれば料理は誰でも作れるが、そこにある適当な材料を組み合わせる能力こそが日常では大事なのだとわかったのもつい最近だ。

そんな風にして、ふんふんと頭の中で明日の朝食の献立までを考えていると、「よし。帰ろう。ご飯食べにいこ。おなかすいた。おごってあげるからおいで」と智美さんが一方的に通告して立ち上がった。

えっ、と驚いている僕にかまうことなく智美さんは机においていたカバンを手に取り、部室の鍵を持ってドアを開ける。状況がよくわからずぼかんとした僕に向かって、智美さんはドアを手で押さえながら、猛威っぽい手で部室の鍵をぶらぶらさせながら

「ほら、ご飯おごってあげるって言ってるの。早くおいで」

と僕を促した。つまりこれから僕らは2人でご飯を食べに行くらしい。状況がようやく飲み込めた。

「珍しいですね。先輩が誘うなんて」と、僕もカバンをとり、戸締りをして電気を消しながら思わず言ってしまうと

「そりゃ1人で真面目にがんばってる後輩見たらおごりたくもなるよ。私にもそれくらいのやさしさはある」と大真面目な顔で返してきた。それと同時に智美さんが部室に鍵をかける。

部室からエレベーターホールに向かう際も1階に向かうエレベーターの中でも智美さんは特になにもしゃべらず、右手に持ったキーホルダーを振り回しながら上機嫌に最近流行っているアイドルグループの曲をハミングしていた。途中の階で人が乗ってきてもハミングをとめないのを見て、こんな芸当僕にはできないなとあらためて智美さんの自由っぷりに感心する。

閉館直前のラウンジはいつものように人であふれていて、どこのサークルも新歓期特有の浮ついた雰囲気にも包まれていたからちょっとしたお祭り状態だった。智美さんは人波を掻き分けて事務所向かい鍵を返すと、大きな声で「じゅんくんほらいくよ！」と僕を出口の方に呼んだ。これにはさすがに閉口してしまう。ただでさえ美人と名高く毎年学祭のミスコンに出場以来がくるルックスのお姉さまが、人だかりの中でそんな大きな声出したら注目を浴びてしまうではないか。なるべく目立たないように目立たないようにと生きてきた僕はこういうときどういう顔をしたらいいのかわからない。下を向くようにして慌てて智美さんのところへ走り寄った。好奇心に満ちた視線が四方八方から突き刺さる。もし人の視線が銃弾だったら今頃僕は死んでいる。

僕は智美さんに引っ張られるようにして部室棟を出て、近くのファミレスへと足を運ぶ。部室棟を出た直後に「ファミレスでいいよね」と言ったきり特に言葉を投げ掛けてくることはしなかった。饒舌な人だけど、沈黙が苦になるタイプというわけでもないみたい。

学生でゴった返す、嬌声と煙草の煙が第2次世界大戦前夜の各国諜報部員の間を渦巻く陰謀と同じくらい濃厚に立ち込めるファミレスに入り、まず僕らは席があくまで15分くらい待たされた。智

美さんは今度は何かを考え込んでいるようで、話しかけられる雰囲気ではなかったし智美さんから話しかけてくることもなかった。

ようやく席に着き、ご飯を食べ始めてからようやく智美さんは口を開き始めたのだが、特にはいつもとかわることなく、口数が殊更増えるでもなく、淡々とサークル活動の延長のような雰囲気僕らのご飯を片付けた。一応会話らしい会話はしたものの、今度の合宿どこにしようかだの勧誘でどれくらい人が入りそうかだの、終始事務的でとても男女の会話とも仲が良い先輩後輩との会話ともいえない何かを1時間ほど僕らは続けていた。

僕の感じていた違和感はこちらだ。「なんで先輩はわざわざ僕を食事に誘ったのか」。とくに会話が盛り上がるわけでもなく、この程度の話なら別に部室ですませてしまえばよかったのに。どうも智美さんらしくないというか、無駄な行動はしない彼女にしては珍しい一面だな、などと僕は考えていた。

「明日は何時頃来るの」

「部室棟が開く時間にこようかなあ、と」

「早いね。他には誰か来るの」

「いやあわからないですね」

「そうかあ」

沈黙。

「今日までにどれくらい問い合わせ来た？」

「うーん大体40人くらいですかね」

「めちゃくちゃ多いじゃん」

「今年はすごいですよ」

沈黙。

だんだんどうにも歯車が噛み合わなくなり、喋ってる時間と沈黙している時間が大体同じ割合になってきて、2人で隣のテーブルを眺めたりし始める。隣のテーブルに座っている2人組は、テーブルの上のサラダに手をつけず、さっきから延々とひとつのパソコンを2人で覗き込んであれやこれや元気に語り合っている。放置されたサラダは明らかに元気を失っていた。

紅茶も飲み干してしまったので次はコーヒーでももらいにいこうかな、とドリンクバーの方に目をやり智美さんは何か飲むかなと彼女のコップを見ようとすると、智美さんは突然「うーん。やっぱうまくかないなあ」と言いながら両手で自分の頬をパシパシ叩く。

僕も驚いたけど、隣のテーブルの人たちも驚いたようにこちらを見ている。また注目を集めてしまった。

どうしたものかと、動揺しつつ智美さんをまじまじと見つめると、

「いやさあ、私ってこんな性格だから年下の子と何離したらいいかわからないんだよね。ごめんね。そりゃじゅんくんは後輩だからさあ、先輩に対して気さくに話しかけられるわけでもないんだし？私がちゃんと会話してかないといけないんだけどねー。いやーダメだダメだ」

と、彼女は一気に語り伝票をつかんで立ち上がり「呑もう。酒が入れば少しはわかるんじゃない？」と僕を急かしレジへと向かった。呆然とする僕は、智美さんはこの店を出ようとしているということだけわかり、慌てて後を追う。隣のテーブル客の視線がまだ背中に張り付いているような気がしたけれど、そんなこと気にもしてられない。追いつくと智美さんはレジのベルを楽しそうに鳴らして店員を呼んでいた。どこか上機嫌だということはわかる。

ファミレスを出て、これからどうするのかわからない僕は智美さんの後ろについて歩きながら明日の朝食について考え始めていた。智美さんはどうしたいのか未だによくわからない。呑みにいこうみたいなことを言っていたような気はするのだけど、それも確かではない。明日はトーストと、賞味期限の切れた卵でなんとかしのごうか。6枚切の食パンだから今晚から漬け込んでフレンチトーストってのもいいかもしれない。

「うん、どういう会話をしたらいいんだろう？あんまり先輩後輩を意識させないのって難しいよねえ」と智美さんはさっき一言だけ呟いたあとは黙り込んで歩き続けている。特にどこに行くとも告げることもせず、僕の前をすたすたと駅のほうへと向かっていく。呑みたいらしいからたぶん駅周辺の居酒屋にでも向かっているのだろう。何か話しかけるべきなのかどうかともわからず、ただついていくことしか僕にはできなかった。いっそのことコンビニでベーコンでも買ってベーコンエッグとトーストにしようか。しかし紅茶を切らしていたかもしれない。紅茶はスーパーで買ったほうが安上がりだ。インスタントコーヒーはまだあったはずだけど。

駅前のにぎやかな一帯に差し掛かり、僕は突然財布の中身が不安になってきた。今日はいくらくらい持ち歩いてたっけ。3000円程度で済むならたぶん間に合うはずだけど、まさかそれ以上にはならないよねなど現実的なことをあれこれ思案しているうちに、智美さんは一帯を素通りして駅構内へと入って行ってしまった。

「あれ、智美さんどこ行くんです？」

さすがに堪えきれなくなって僕が尋ねると智美さんは小首をかしげながら

「え？うちでよくない？どうせ朝まで帰すつもりないし、家で飲んだ方が安上がりだし私の家ここから一本だし、私だって一応女なんだから気になる可愛い年下のオトコノコくらい部屋に誘ってみたいじゃない？先輩特権だよ」

と一息に言ってから僕の手を握ると改札へと向かっていった。あれ、僕Suicaの残額いくらくらいあったっけ。